

## 京都秋期福音特別集会

## 本日一生

## ——マタイ伝6章22節～34節——

1974年11月16日

小池辰雄

聖書はドラマ 化体現象 第二の宗教改革 身の燈火は心眼 神を映す 絶対現実に自分をつなぐ 天地自然の声 神・自然・我が一つに 十字架の門 未解決のまま解決 自然に備わる力が霊界からやって来る 信頼生活 神の国がそこに現れる はいっ、もう来ました 一つのこと打ち込んでいく 魂の大回転 祈り

## 【マタイ6】

22 身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。23 然れど、なんじの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。24 人は一人の主に兼事うること能わず、或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼事うること能わず。25 この故に我なんじらに告ぐ、何を食い、何を飲まんとして生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや。26 空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙に優る者ならずや。27 汝らの中たれか思い煩いて身の長一尺を加え得んや。28 又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、勞せず、紡がざるなり。29 然れど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき。30 今日ありて明日、炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。31 さらに何を食い、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。32 是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。33 まず神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし。34 この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり。

## ●聖書はドラマ

聖書は、



「何が書いてあるだろうか？」

と、「分かつう」なんていう気持ちで読んでも、これは分からないんです。参考書を読んでも、何をどう勉強しても、周辺は分かれますけれども、中身は分からない。というのは、いわゆる「分かる」という角度で読む本ではない。キリストはヨハネ伝で

「私を飲め、私を食らえ」

と言っておられる。今のキリスト教も——おそらく仏教もそうだと思うんですが——宗教の事態がずれてしまっている。いわゆる学問を勉強するように——学問だって本当は絶学しなければ本当の学にならないけれども——とかく現代人は頭が先に立つ。20世紀は頭でつかちで、ひっくり返つてしまう。足がしっかりしなければダメなんです。

聖書はドラマですから、聖書くらい面白い本はない。聖書が楽しくなるまでは、まだ本当に読んでないということになるわけです。

「何だか七面倒臭い固苦しい本だ」

なんて思ったら、それは大間違いです。これほど楽しい本はない。近頃、マンガばかりみな読んでいるようですけれども、聖書のマンガはそんなものではない。これは生命が来る本です。他のどんな本を読んでも、プラトンを読んでも、カントを読んでも、あるいは有名ないろいろな文学的な作品を読んでも、生命そのものをずばり与えてくれるものは聖書の他にないわけです。

キリストは、

「聖書は私を証しているんだよ。聖書は我なり」

というようなわけです。そういうキリストに直々にぶつかる、自分がその活劇中の人物となり、キリストと常に対話をしながら——いわゆる「話し合い」なんていうものではない——本当に説き伏せられてしまう。そして、キリストには「参りました！」と降参する。このドラマの中で降参する。

イスラエルのアブラハム、イサク、ヤコブという、このヤコブが天使と相撲をとって、股ももの関節をはずされて、そして参った。降参しながら、

「祝福してください。それでなければ、あなたを離しません」

と言って、くいついた。これが、ヤコブが「イスラエル」にされたゆえんです（創世記32・24～28）。あのヤコブの角度、あのとつ組みの角度が、これが福音を受けとる角度です。

「烈しく攻める者がこれを奪う」（マタイ11・12）

というような凄い言葉があるように。キリストの中に自分を投げ入れていくことです。そういう気持ちで、聖書に対していただきたい。そうでないと、何年教会に通おうが、日曜に聖書研究をやるのが、いつまでたつても周辺であつて、中には入れない。



## ● 化体現象

「信仰」というと、何か

「仕方がないから、まあ信じておこう」

なんていうものではない。一番現の世界ですから。これは本当に受けとる世界です。この花は太陽の光を思つて咲きましたか。思つて咲いたのではない。花は太陽の光を直かに受けて、葉や花びらの中に浸透させて、そして白くなり黄色くなり、というわけです。根っこは土の中から養分を吸い込んでいます。そして、こういうような花に咲いている。これはみな化体かたいしている。体からだに化している。化体現象を起さなくてはいいかん。すべて観念的なものはダメですから。具体的なものです。聖書の真理も——「分かった」ではない——化体しなければダメです。

「我は道なり、真理まことなり、生命いのちなり」(ヨハネ14・6)

とキリストが言われた。その道を歩き、その真理を身をもって受けとる。真理を身をもって受けとることが「道」なんです。キリストにとつては、真理も道も生命も実は一つなんです。ただ三つの表現で言っているだけのはなしです。

日本人は道の民だと、いつも私は言っています。真理を身につけることの本来できた民であつたのに、なにか西洋的なものの考え方になって、身につけることがなくなつてしまった。一番の責任者は小学校から大学に至るまでの先生方です。そういう本当の教育をしないものだから、さんざんいろいろな問題が起きています。

## ● 第二の宗教改革

今朝、テレビで文部大臣が話していたが、一番先に何を問題にするかと思つたら、

「教職者の待遇を良くする」

と言う。どうして、そういうことを仰るんですかね。また、みんながそういうことを言つて、待遇の問題ばかり考えている。

「待遇を良くすれば人が良くなる」

なんて、冗談じゃない。それはもう、6章のところでキリストが言つておられる。キリストのこの言葉を本当に受けとつてないから、今の文明はこんなことになつてしまった。先生方自身が本当に——いわゆる修養というような言葉は使いたくないけれども——真理を生きるような願いをもつていなかったら、日本の教育は、どんなに待遇が良くなつたって、それでどうなるものでもない。制度が良くなつたって、どうなるものでもない。私はもうむかむかするものだから、全国私立高等学校校長会議でもつて、千何百人の校長さん方を相手に必ず私は一言してしまふ。あるときも、

「校長さん方、どうですか、ひとつ山に籠もつて瞑想でもしませんか」

なんてことも言つた。正直、こんなことをしていたら、日本は精神的に滅びです。日教組



がどうだこうだということではない。もつと根本的に、魂の入れ替えをしなければダメなわけです。

なにも先生方をまつ必要はない。あなた方一人びとりが第二の宗教改革を要するんです。マルチン・ルターの宗教改革は、本当の自由は何であるかを示して、近世が始まったんです。ところが、この自由を今度は勝手気儘な手放しの自由にしてしまった。

「神における自由」

ではなくなつてしまった。ルターも天界で嘆いているでしょう。今、自由だとか、自主だとか言つたつて、本当のことを分かつていないんですよ。哲学をなさる方でも、本当に聖書を読んでいなかったなら、あるいは東洋の仏典にぶつかつていなかったらダメです。何と言つても、キリスト教と仏教のこの二大宗教を無視して、世界の精神史は成り立たない。

### ●身の燈火は心眼

では、マタイ伝6章に入ります。

22 身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。

「身の燈火は目なり」

とは素晴らしい言葉です。

私の母は失明しました。母は独りで私たち子供五人を育ててくれた。非常に苦勞しました。長男が北京で仆れた。迎えに行つて、帰りに、失望落胆と今までの過勞とが重なつて、黄海の上で失明してしまつた。私は本当にあの時は参つたね。母は目を失つて、兄の遺骨を抱えて帰つてきたのだから、私はどうにもならなかつた。窒息しそうでした。

なんと言つても、目のご不自由なことは本当にお気の毒だと思ひます。手が片一方ないとか、足が悪いとかというよりも、人間の地上における肉体上の不幸では、おそらく失明が一番深刻ではないですか。

「身の燈火は目である」

という。

「目に光がなかつたならば、どうして神の光を受けることができるであろうか」という意味の言葉をゲーテが言つてますけれども。

「目は心の窓である」

という。ですから、目と心とはまたこれ一つ。目に心の状態がすぐ出ますね。悲しい時には悲しいような目をする。うれしい時にはうれいような目をする。神さまは不思議に造つてあるね。怒つている時には怒つたような目になるし。どういふことになつてゐるか知らんけれども。目はまた心の表現です。「目は心なり」と言つてもいいくらい。心眼と言つてもいいわけです、

「身の燈火は心眼なり」



と。だから、失明していらっしやっても——目あきは盲で——逆に盲が目があいている。このことはヨハネ伝9章に書いてある。

「見えると思っっている者はかえって見えない」と。

### ●神を映す

心の心眼が見るところのものは現象界ではない。超現象界です。

「心の清き者は幸いなり。その人は神を見ん」

とキリストが言われた。即ち、心眼が澄んでいると、神が見える。神が見えると言っても、「見神」といって、なにか特別に神秘的な現象を追うんじゃないですよ。非常に素晴らしい光が祈りの世界で映ってくることはあります。けれども、本当に「神が見える」という表現をするような事態は、そういつた「神が見える」というのは、もうひとつ言いますと、「神を映す」んです。心眼が澄んでくると、こちらが神を映すことになる。

「心眼が澄む」とはどういうことでしょうか。それは私心のないこと。無心、無私心ということです。自我に執したような、いわゆる自主だとか自由だとか言っているうちは、あいているような顔をしているけれども、実は目が曇っている。即ち、自己がぬけているときに、無心の心になっているときに、この心眼が本当に開いている。そうすると、神が映ってくるわけだ。

太陽の光は一切のものを在るがままに映してくれるが、他の、人間が作った蛍光灯とか何とかというのと、いろいろそこに色が生じてくる。神さまの白光が本当に見えるためには、こちらがやはり自己からぬけなくてはいかん。だから、

「身の燈火は目なり」

と言うときに、その「燈火」とは神の火を、神の光を受けているときに初めてその「燈火」なんです。即ち、我々の目が本当に燈火であるためには、神の光が灯つていなければ燈火とは言えない。神の光が灯るためには、自己が無くならないと、これが灯らない。それが手放しでできたのはキリストであります。神さまがキリストに映ってきて、今度は、キリスト自身が神の光の結晶体みたいになってきたわけだ。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

ということになった。キリストは目が本当に神に向かって開いていましたから、彼の全身は即ち、光的な、神的な存在となっているから、神を映しているから、本当に似姿になっている。

「人を神の似姿に造った」

と創世記にあるが、キリストは即ち神の似姿になってしまったから、

「我を見し者は父を見しなり」



と彼は言えた。

そういうわけで、「身の燈火は目なり」という言葉は非常に深い内容を持っています。単なる肉眼のことを言っているのではない。肉眼の奥に心眼をそなえていなかったなら、そんな目は本当の目ではない。

<sup>22</sup>身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。  
を口語訳では何と訳してあるかというところ、

「目はからだのあかりである。だから、あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいだらう。」

汝の目「ただしくば」は、「澄んでいいる」と訳してもいいけれども、本当は「シングル」ですね。単眼、ひとつ目ということ。目が統一されていることです。目は二つあるけれども、それが本当に一つであるならば、ということ。

本当は目の中間に、眉間のところに心眼というのがあんだ。これは瞑想の世界で深くなると、このところがちよつとむずむずしてきますけれども。即ち、「目がただしい」とは、目が一つ、純一無雑ということ。ドイツ語の訳に「健全である」という訳もありますけれども、健全ということよりもちよつとそういったような気持を持っている。

「全身あかるからん」とは、

「全身は光となるであらう」

ということ、むしろもつと強い意味ですね。あるいは、

「光に満たされるであらう」

ということ。即ち、汝の目が本当に単一、純一であるならば、即ち、澄んでいいるならば——いいですよ、「澄む」でも。自己がないことです——それならば、全身は光に満たされる。光に貫かれる。心眼が神の光を受けるから、これが全身に浸透してくるというわけです。「燈火」とは、そのように神の光に灯されることなんです。神の光に灯されなかつたら、いくら頑張つたつてダメですよ。

<sup>23</sup>然れど、なんじの目あしくば、全身くらからん。……

即ち、自己に囚われているならば、これはもう暗くなってしまう。

<sup>23</sup>……もし汝の内の光、闇ならば、その闇いばかりぞや。

ここに「内の光」というように、この心眼のことを言っているわけです。

### ●絶対現実に自分をつなぐ

<sup>24</sup>人は二人の主に兼事うること能わず、或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼事うること能わず。

キリストの論理は飛躍する。即ち、この世の事態と、それから、超この世、超現世の事態。



いわゆる相対的現実のものに自分の心を従えるか、あるいは、相対を超えた絶対的現実のものに自分を委ねるか、このどっちかである。我々は絶対現実、あるいは根源現実の中に自分をつなげろ、入れろということ。相対的な現実のこと、これが「富」です。富と言ったって、ただ金のことを言っているのではない。この世の事態一切が「財宝」「富」です。「現世的なもの」ということを「富」と言ったわけだ。この現世的なものに屈伏するか、超現世的なものに従うかということ。

魂は現世的な相対的などんなものによっても決して本当に満たされない。必ず空しさを覚える。空しさを覚えない人もありますよ。それはもうお終いだ。空しさを覚える方はいんですよ。そしたら、空しからざるものを求めるのだけれども。ところが、その空しさを覚えない人がだいたいぶんあるようだな、この頃は。けれども実は、その姿を見てみると、これを求めたりあれを求めたりと移っているということは、実は空しいことなんです。実は、満たされないこと、満たされないことであるいろいろなやつているわけだ。ところが、はつきり申上げて、魂はそれではどうにもならないように実はできているんだ。

「我々の魂は汝のうちに安らつまでは安きを得ず」

とアウグスティヌスが言った通り、我々の魂はそんな安っぽくない。

「汝の生命は全世界とも代えることができない」

とキリストが仰った。「汝の生命」の「生命」とは「魂」と同じ言葉です。そのように、キリストは一人びとりの「個」というものを絶対的なものとして評価した。我々の存在が本当の絶対的な価値を持っている。ということとは、

「神につながらざるを得ない存在である」

ということなんです。手放して「絶対」なんて言っているのではない。手放して絶対なんて言うから、今度は、とんでもない傲慢なことになってしまう。

「我々が絶対である」

ということとは、

「神との相対関係を絶対に切れない」

ということなんです。これが絶対性なんです。神・仏との関係を切ったならば、魂はどうにもならん。死ぬというと、みんなお経をあげてもらったり、教会で葬式をあげてみたりする。この頃、そうしないのもあるけれども、ああいうのはどこへ行くか知らんよ。

とにかく、魂の世界は、そういうように20世紀の人間が狂ってきたら、もう処置なしですね。今の状況を見ていると、これは本当に精神的に危機的です。本当の人間らしさが、メンシュリツヒカイト（人間性）が失せてきた。ゲーテがもう今から百何十年前に予言しているよ、

「そのうちに文明のために人類はかえって苦しむときが来る。どうぞ、ドイツ人も

今から百何年かあとに、ただ本当に人間であるということだけを獲得してもらいたい」



と。さすがにゲートルです。先をもちやんと見ている。

## ●天地自然の声

ゲートルが出てきたから、ついでに彼の言葉をちよつと引用しておこうかな。これは『序詞』の中の言葉です。

「静けさにおいて自然の声に耳を傾けることのできる人は自分自身を見出しまた神を見出す」

ゲートルらしい言葉です。即ち、自然の声、天地自然の声というのがある。

「<sup>2</sup>この日ことばをかの日につたえ、このよ知識をかの夜におくる。<sup>3</sup>語らず  
いわずその声きこえざるに、<sup>4</sup>そのひびきは全地にあまねく、そのことばは

地のはてにまでおよぶ。」(詩篇19・2～4)

というような声を聞くことです。静けさにおいて自然の声に耳を傾ける。寂聴するわけだ。そういうことのできる人は自分自身をそこに見出し、また神を見出す。この気持がわかりますか。ゲートルというひとは、「神・自然・我」というものが溶け込んでいるひとです。自然の中に神を見る。また、そこにおいて本当の自分を見る。自然と自分が一つになっている。花を見れば花となってしまう。風を見れば風となる。水を見れば水となる。樹を見れば樹となる。草を見れば草となる。そのような、生命的な共感を感じて生きてたひとです。自然を人間のために利用して、いろんな細工をして勝手なことをして、とうとう公害現象になってしまった。

「もつと自然を尊べ、自然に親しめ。そうしないと、文明はおかしくなるぞ」

とゲートルは言っている。その通りです。

この大自然は神の創造のわざです。そこにおいて神を見る。

「それは汎神論ではないか」

なんて、下らないことを言わない。すぐ、なにか観念的に割り切つて、なんののかんと言ふやかましいのがあるね。ああいうのは本当の真理がわからない。具体的な生きた構造が分からない人は、すぐ分析して、そして決めつけてしまう。そして、どこに真理があるかと、一生懸命で観念でもつてひとつの限定をしようとする。限定したら、真理はみんな死んでしまう。

「本当の真理というものは定義できない」

と、ゲートルは『ファウスト』の中でも言ってますよ。まあ、あなた方はドイツ語をやるんだったら、とにかくゲートルは読まなくてはダメだ。大きくなれない。中国の老子みたいに大きくなる。

なにしろ、クリスチャンは、本当のクリスチャンというのはでっかいんですから。

「キリスト教なんか信じたら、なにか狭つくるしくて、おかしいことになりやしない



いか。人間性がなくなる」

なんて、冗談言っではいかん。これはもつとも凄いです。全宇宙を呑んでしまうようなひとになる。だから、私はゲートを読もうが、ダンテを読もうが、ドストエフスキーを読もうが、何を読もうが、みんな分かってしまう。

「小池なんてのはなにか変な野郎だな。大したものでもなくせに、大言壮語しやがる」

なんてね。いや、大言壮語でも何でも無い。私は何もものでもないから、キリストが、キリストの光が、キリストの霊が来れば、そういうことになる。

ゲートはキリストの前に無条件に降伏したではないですか。

「キリストの前には自分は無条件に頭をさげる」

と、彼は死ぬ二週間前にエッカーマンに言ってます。ナポレオンもセントヘレナでとうとう最後に福音書を聞いて、

「福音書は本ではなかった。これは生き物であった。大変なものだ」

と言っ、彼は目が覚めた。さすがは、ナポレオンですよ。

皆さんは、そこらにあるようなレットル・キリスト教ではダメですよ。だから、私は言っているんです、

「私はプロテスタントでも、カトリックでもない。キリスト直結だ」と。

「あなたはプロテスタントですか？」

「いえ、そうではありません」

「では、カトリックですか？」

「いや、そうではない」

「では、何ですか？」

「私はキリスト直結なんです」

なんて言っ、冗談言っているかと思うが、それは本当なんです、私は。皆さんもキリスト直結に、キリストの直弟子たちになってください。だから、

「使徒的信仰に帰れ」

と言っているんです。私みたいなものがどうしてもそういうことを言わなければならないようなことに、世の中はなっってしまった。

●神・自然・我が一つに

ゲートは、「神・自然・我」というものが溶けてしまっ、一つになっている。一如の世界です。そうすると、普通のクリスチャンはすぐ

「十字架がないではないか」



と言うんだな。

「そんなことはちよつと待つてくれ。こういう句にぶつかつて、ああ素晴らしいな

あとは思わないですか、あなた方は」

と言うんだ、私は

これもゲーテの『プロエミオン（序詞）』という中に出てくる素晴らしい句です。

「ただ外側からつつ突くに過ぎないような神であるとするならば、そんな神は何である

うか。指先で環をなして森羅万象（天体）を走らせている神

即ち大自然の神

それにすぎないようなものが神であるとするなら

それをただ否定しているわけではないけれども、

それだけが神だとするならば、一体何だ。神さまにとって相応しいことはむしろこう

いうことである。この世界（宇宙）を内側において動かして、

外側から動かしているのではない

自然を自分の中に、自分を自然の中に抱いている。

自然と神さまとは抱き合っているような事態だということ。

神のうち生き動きたるところのものは、そついった生きとし生けるもの（人間）

は決して神の力を、神の霊を失うことがない。」

と。これは使徒行伝（17・28）のパウロの言葉を彼がここに持つてきたわけです。即ち、ここでもやはり「神・自然・我」というものが一つになっている。神さまが自然と一つになるような具合にして、我々の中に、その自然とまた一つになっている。その神の中において動くということになったら、神の力も神の霊も失われることがない。

シラーが、

「神さまは最大の芸術家だ」

と言いました。創造者です。人間は神の傑作である。神の似姿に造られていると。これは神話であつて、神話でないですよ。

私たちが大自然と分かつことができないような生命の中にある。星の要素も自分の中にあるといったような具合に。それだけの体感に、身体で感ずるようなことになってごらんなさいよ。私かなぜ生命的であるかという、私はそういう感じをもつて生きているからです。ゲーテさんと同じように。花を見れば、私は花になりますよ。路傍に咲いているような花であろうと。

こないだ、三重県の女人高野山という所を尋ねた。あそこの杉林たるや大変なものだ。千年くらいの杉ですよ。亭々と聳<sup>そび</sup>えて、天を本当に摩<sup>ま</sup>すると言いたいくらいでした。私はあの杉をじーつと見上げていて、動けなくなつてしまった。何と言うか、千年の生命と共になつてね。私はバカみたいな人間なのかしら。あなた方はそういう感じにならないんで



すか。もう少しバカになってくださいよ。皆さんはあまり利口すぎるから。

「なんだ、この杉は千年たっているのか」

なんて見ている。私はバカだから、それに驚嘆するんです。そういうわけで、私は日本中歩いて、くたびれない。くたびれるところではない。いよいよ生命が来てしまう。

日本の天然はことに素晴らしいのだから、皆さんは本当にこれを損なってはいかん。どうして、こう日本人は変えてこになってしまったんだろうね。ぜひとも、あなた方一人びとりが世界的な日本人になってもらいたい。あなた方一人びとりが身をもって宗教改革をしてもらいたい。誰かがするのではない。

「20世紀にマルチン・ルターみたいなのが出てくるといいなあ」

なんて、そうじゃないですよ。あなた方一人びとりがルターとなり、カルビンとなり、ウエスレーとなつてください。親鸞、道元、日蓮、何でもいいです。

### ●十字架の門

目が、神の心眼が、神の灯火ともしびとなる。それははつきり言うと、キリストを受けとってください。イエス・キリストが

「我は世の光なり」

と言われた。即ち、キリストは光であつても、実はキリストは自分が光ではなかった。神さまが光であつたが、この光を全身で受けた。キリストは光となりたもうたから、今度は、

「お前たちも光となれよ。汝らは世の光なり」

と言われた。

「私を受けろ。私を受けたら、お前たちも世の光となる」

ということ。どんなに周りが冷たかろうが、熱くしてやる。どんなに周りが暗かろうが、明るくしてやる。

「わがうちなるキリストを見よ。この灯火は、嵐が来ても、この世のいかなる艱難

が来ても、絶対に消えない」

と。いいですか。「自分の信仰」なんて言っているうちはダメですよ。自分の信仰にすら絶して、ただキリストを受けることだけ。そういうことになりましたら、もう大丈夫です。キリストは神さまの outlet ですからね。

「我を見し者は父を見しなり」

という、この神さまの outlet のキリストの中に自分を投げ入れて一つになつてしまふ。キリストは神の中にある。これだけです。何も難しくない。

「どうやったら、入れるんですか」

なんて聞くでしょう。ええ、入り方を教えてあげよう——あの『ファウスト』の中のメフイストーフェレスとは違いますから——入り方は何でもありません。これは十字架がある。いつ



も申し上げておるとおり、門は十字架の門です。

「我は門なり」

とキリストが言われた。十字架という門を通して行く。十字架にぶつかってくださいますよ。キリストを受けとつたならば、「自我」は十字架ですつ飛ばされていく。十字架がなぜ門かと言うと、自我にとらわれて目が澄んでこないのを、

「それは全部、私が引き受けたから。お前の目をきれいにしてやる。心眼をきれいにしてやる」

と言って、キリストが十字架でもって「我」というものを全部ぬぐってくださった。「我」というものを拭い去ってくださった。自我というのが「罪」なんだから。

「罪を贖った」

というのはそのことです。キリストが

「自我を全部引き受けてしまった」

ということ。私のしょうがない我というものを全部引き受けてくださったから、

「お前は相変わらずダメだけれども、そんなことは問題にしないでいいぞ。私を受

けろ」

と言うんです。

「はいっ」

と応える。その他に何かあるんですか。平伏して「はいっ」と言う他にはないではないですか。それをいろいろな文句を言っているから、

「でも、でも」

とデモ行進ばかりやっているから、いつまでたってもダメです。いいですか、簡単明瞭なんです。

### ● 未解決のまま解決

それが「身で受けとる」ということです。そうしたら、もう、相対的なものは問題でなくなりました。キリストという絶対的な光、生命を受けとる。絶対界と自分の魂が交わってきたら、もう問題はなくなりました。この世にはさんざん問題がある。これは世界の歴史の終りまで問題だらけ。そんなものはどうせ片付きっこない。問題だらけの中にいて、問題でない世界をつかむことがこの宗教の世界なんです。そこから問題をも担っていく。解決しなくなつていい。必ず勝っていく。未完成の完成というのがあるが、未解決のまま解決している世界があるんです。

それをどうしても受けとらないことには、いくら道徳で何と言おうが、教育で何と言おうが、ダメなんだ。本当はそういう教育をしていかなかったらダメです。少なくとも大学生は、また大学生と同じような年輩の方々は——ちようど20歳前後から25歳くらいまでの間は—



番大事なとき——このときにこの世界に突入しないことには、その時期にいろいろなくだらない騒ぎばつかりやっているからダメなんです。でありますので、

「神か、マンモンか」

とキリストがここで言っておられるわけです。「神か富か」ということは、「本当の絶対界か、相対界か。どっちにお前の魂をつなぐか」ということです。

「私たちの魂はこの相対界にありながら、常に絶対界につながる」

という。いつ地震で我々は仆れるか知れません。いつ交通事故でおかしなことになるかも知れませんか。いつどうなっても、

「然り。アーメン、ハレルヤ。万歳！」

と言って、向こう側に往けるような在り方です。だから、私は今日、演題に

「本日一生」

と書いた。今日が即ち一生である。明日のことはどうでもいい。明日が来たら、また「本日一生」として生きようじゃないかと。ということは本日というところに——実は一生どころのさわぎではない——永遠を持っているんです。これは

「本日永遠」

でいい。わが一生は永遠なりと。私は永遠の青年であります。

### ●自然に備わる

「何を食い、何を飲まん」と生命のことを思い煩い、何を著きんと体からだのことを思い煩うな」

それを思い煩うのは現代人である。百貨店生活である。日本くらい百貨店の進んでいる国はおそらくないでしょう。地下鉄が百貨店に入ったりなんかしている。ドイツにはそういうものはない。外国人が来てびっくりするんだ、日本の百貨店には何でもござれで。私は経済のことは分からないけれども、どうしたんですかね、この日本という国は。儲けよう儲けようという根性が結局、かえって自分を苦しめている。

「何を食い、何を飲まん、何を着ん」

と、そんな衣食住のことは二の次だ。私もさつき、こういう世の中に対してはひとつ抵抗的な生活をしようかなと、ちよつと思つた。たくわんと味噌汁とお豆腐とご飯で生きていこうかなと思つた。そういうシンプルな生活をしていく。

なくてならないものはちゃんと自然に備わっている。薬もそうですよ。草根木皮なんていう。西洋の化学的なものより、自然から取り入れたものもいい。自然と一つに我々は生命的に連なっているんだから。もう分かりきっている。鍼でもお灸でも、東洋の今までの



経験からきているものはみな素晴らしいですよ。東洋人というのは、体験や直観でものをつかんでいくような、自然との親しみが本来あったんだ。ヒポクラテスという医学の元祖も言っている。

「人間は本来自然に自分の身体が治るような力を持っている。その自然力に頼れ。薬になんか頼るな」

と、むしろ医学の祖がこういうことを言っているんだから。ルソーも、

「自然に帰れ」

と言ったが、大自然は神さまの創造したもので、そこに神の栄光が現われている。29節にも書いてあったでしょ。

29 然れど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき。

と。この花一つに人間の人工の美以上のものがある。生命的な光を持っているからです。人工の美には外形的美わしきはあるけれども、生命的な光がない。どんなに立派な造花を作っても、自然の花は虫に食われていたって、こっちの方が本ものだ。皆さん、本ものになつてくださいよ。偽クリスチャンだとか、偽大学生なんてのはダメだ。

聖書はそういうものを与えないではいられない。これは文字ではない。ここから響いているんです。文字の奥から生命的な響き、また光が、靈的な光がさしている。それが見え、それが聞こえてこなければ、本当に読んでいるとはいえない。いいですね。そこらの

「聖書研究会」

なんてのはよしなさいよ。研究ばかりして、ほじくつてばかりいる。ギリシア語だへブライ語だなんて。ギリシア語やへブライ語をやるなど言うんじゃいけないけれども。

「ギリシア語やへブライ語が分かったから、聖書はよりよく分かった」

なんて、冗談言うなど私は言うんです。日本語でたくさんだ。眼光紙背に徹するんです。もう、もってまわったようなクリスチャンがいて困るよな。

●力が霊界からやって来る

我々はもう心配いらんですよ、物価がどんなに上がったって大丈夫です。そんなことでもってうろたえないでください。

「何を飲み、何を食らい、何を着んと思いたい煩うな」

と言う。キリストと一緒にやっていけば、何か知らないけれども、そこらの普通の栄養以上のものが霊界からやって来る。祈りの世界で力が来るんです。自然を見ていけば、そこから、見ているうちに生命が伝わってくる。それだけの神秘的な事態を受けとってください。

28 又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、  
勞せず、紡がざるなり。29 然れど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモ



んだに、その服装よそおひこの花の一つにも及しかざりき。  
サウル、ダビデ、ソロモンという、紀元前千年前後に現われたところの単立王朝時代の最後のソロモンです。そのときに一番栄華を極めたわけですが、それから分裂してしまつたわけです。その

「栄華を極まめたるソロモンだに、その服装よそおひこの花の一つにも及しかざりき」  
と、キリストの仰ることは素晴らしいですね。これは非常に詩人的な言葉です。どんな人工の美も神さまの創造の業にはかなわない。小さなひとつの桔梗ききようを見ても、何とも言えないわけでしょ。撫子なでしこを見ても。

「人間の人工的な文明文化が行き過ぎたならば行き詰まるよ」  
ということがこのキリストの言葉の裏にはあるわけです。キリストの根本精神をつかまえないとダメです。

「キリストの頃は呑気な世界だから、それはそれで済んだらうけれども、今はそうはいきませんよ」

と。それは相対的にはそうも言えますよ。けれども、もう少し奥をさぐると、それではやはりダメなんです。

### ● 信賴生活

30 今日ありて明日、炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装まい給えば、まして汝きらをや、ああ信仰まことうすき者よ。31 さらに何を食くい、何を飲のみ、何を著あんとて思い煩わづうな。32 是みな異邦人の切きに求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なひつぎなるを知り給うなり。33 まず神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加えらるべし。

キリストは確信をもって言われる。

「みんな神さまは知っている」

と。「信仰薄うすき者よ」とは

「神さまに信賴まことしない者よ」

ということですよ。

私の先生であつた藤井武先生は確かに信賴まこと生活をなさいました。先生は亡なくなった時に、財布の中はゼロ。貯金も何もない。先生の著作だけが残のこっている。それがお子さんたちを育ててしまった。本当に信賴生活を先生はなされた。私は先生と一緒に日曜日に時々遅くまでいて、一緒にご飯を食べると、時々、先生はバターなんか買かえないんだな。パンにお砂糖をつけて食べる。私も一緒にお砂糖をつけて食べた。とにかく、わが藤井先生は神さま一点張りで本当に生きていた。

「もし、神に信賴して生きていて、飢え死にするなら、死んでもいいじゃないですか」



と、藤井先生は言いました。

### ●神の国がそこに現れる

「神の国」とは、もうひとつ別な角度から言うと、「永遠の生命」です。神の国とは

「神さまが支配していたもうところ」

という意味です。もつとはつきり言つと、

「神さまの意志の行われるところ」

が神の国です。こちらが従わなければ、神の国は現じませんよ。神さまはいらっしゃって、神の国はちゃんとあるんだ、どこだって。けれども、神の国は客観的にあるのではない。神さまの意志はもう来ているんだけれども、それを受けとらないところには、神の国はない。至るところにあつて、至るところにないんです。

ですから、「神の国を求めよ」というのは、何か

「客観的にどんなものですか」

ではない。神さまの意志に「はいっ」と言つて従うときに、これが神の国を求めることなんです。また、神の国を現することなんです。

「汝の意志をなさせたまえ」

とキリストが言つて、自分を提身して、

「どうぞ、この私を通してあなたの意志がなつてください」

と言っているのがキリストの生涯ですよ。キリストはただこの一事を貫いたんだ。そうしたらば、キリストにおいて神の国はつきりと現じた。キリストの言は全部、神の言である。キリストの行いはもの凄い力を発している。そこに盲者は目があいてしまつたり、跛者は立つてしまつたり、癩病人が潔められてしまつたり、死人が甦つたりした。これはみんな神の愛の意志がキリストを通してそこに現じたからです。

「ああ、キリストはそうですか。でも、私たちはできません」

なんて言う。けれども、キリストを受けとつたならば、使徒行伝の使徒たちはどうですか。キリストと同じようなことをやったではないですか。我々もまた同じなんです、二千年経とうが何年経とうが。生ける神の生けるキリストに自分を全托して進むところに、そこには不思議なことが生ずる。この私みたいなものを通して、いくつも今までに不思議なことが起きました。そうでしょ。

あなた方一人ひとりとは本当に打ち込んでやつてごらなさい。何かご利益りやくを言うのではないですよ。本当にキリストの中に生き、

「我れキリストのうちに、キリストわがうちに」

となつたなら、誰でもができる。

「何年聞いたから」



なんて、そんなことではない。もう、のっぴきならないところに皆さんは立たせられている。選ばれているんですよ。ですから、世の人がどうのこうののではない。

「我自身が本当にキリストの証し人となろう」

と。これくらい大きな望みは、また喜びは、生きがいは、抱負はないんです。キリストを証しようということが、これが最大の――

「ボーイズ ビー アンビシャス」(青年よ大志を抱け)

と言うけれども――本当の「アンビション」(大志)はそれなんです。自分がどうこうじゃない。自分のこつち側なんかどうだって、五十歩百歩ですよ、そんなものは。

「あれの方が私よりも能力があるから、あつちの方を神さまは選ぶだろう」

なんて、そうじゃない。しょうがない奴を選ぶんです、神さまは。みんなに棄てられるよ  
うな、

「あんな野郎」

なんて思われたやつを神さまが捕まえて、凄いことをなさるんですよ。

だから、「神の国」とは何か客観的なものではない。神さまの前に平伏すところに神の国はある。キリストの前に平伏して、

「主さまー」

と呼ぶところに、神の国がそこに現れる。だから、

「神の国を求める」

なんて、ちつとも難しいことではない。一番手つとり早い、手近かなことなんです。いいですね。

●はいっ、もう来ました

「神の義を求めよ」

も同じことです。「神の義」とは、キリストが即ち神の義なんです。何か観念的なことではない。

「神の義とはどんなのですか。人間の義とどういうように違うんですか」

なんて、すぐ神学者はそんな下らないことを言う。神の義というのはキリストが現れている。

「神の義は福音のうちに現れる」

ということをパウロが言った。これがなかなかルターが初めは分からなかった。神の義というのは怖くて、我々の罪を審いていて、ルターは恐ろしくてしようがなかったんだ。ところが、キリストは神さまに100%「然り」と言つて歩いてきた。そうしたら、神さまはこれを義となしたもうた。聖意が体現しているところが即ち、神の義が成つてるところです。それを実証したこのキリストが即ち神の義人である。

「この義を、義人を、そのまま私はお前にやるよ」



というのが、十字架を通し復活をもって与えてくださろうとしているところのキリストそのものです。だから、「神の義を求めよ」とは、

「キリストを求めよ」

ということ。これは無条件にいただける。だから、33節を読んで、

「まず神の国と神の義とを求めよ」

「はいっ、もう来ました」

と言わなくてはいいかん。この次のところに、

「求めよ。然らば、与えられん」

と、ちゃんと書いてあるんだ。求め方はちつとも難しくはない。自分を投げ出すことだけです。なにか自分を何者かと思っているからいいかん、いつまでたっても。

私の中に、皆さんの一人びとりの中に、神の国は今来ているじゃないですか。神さまの前に平伏しているじゃないですか。どうにもならんから。そして、

「主さま、あなただけです」

と言っているじゃないですか。そうしたら、神の義が来ているじゃないですか。

<sup>33</sup>……然らば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし。

それは、キリストの生命が来るから。それからもうあとは、相対的なものは適当に神さまの方でやってくださいますよ。いつも問題にしているのは、この絶対的なもの。ギリギリのところ。この絶対なる現実、永遠の生命。

「キリストと我は一つである」

という事態です。

「一つである」と、そう言ったって、私はそんなにいきませんよ、私は毎日躓いたり

転んだりしてますよ」

と、すぐ思いますか。躓いたり転んだりしていったって、これは一つなんですよ。

「いくら躓いても転んでも、もうキリストでなければやりきれない」

と言って生きているのが一つなんです。いいですね。

●一つのことばに打ち込んでいく

人にどう思われようと、そんなことは問題でない。

「私の中にキリストは生きていらっしやいます」

とはつきり言えなくては。ということとは、

「自分が立派になりました」

なんてことでは絶対がない。自分が立派であるか立派でないか、そんな相対的なものを問題にしているのではないんです。

キリストの立派さ、キリストの完全性というものはそんなものじゃない。このキリスト



の生命が私の中に生き生きとして来て、

「何かあの人は生きが違つてきた」

と言われるようになる。

「どうも、私は仕事の上でうまく行きません」

とか、学生だと

「どうも、試験がうまく行きません」

とか、いろいろなことがあるよ。それでまた相対的なことを問題にしている。もうひとつ乗り越えてください。そこから力が来るから。力が来て、どんなに失敗しようが絶対にこたれない。必ず活路をまた新しく神さまに与えられて進んで行く。

わが天職は何ぞやと。みんなが大学生なんかになろうとするから、おかしなことになる。日本はレットル大学生ばかりだ。自分に与えられた天来の才能、資質、それを自覚して、そいつを本当に打ち込んで磨き上げる。

『徒然草』の兼好法師が言っているではないですか。

「ただ一つのことをやれ。その他のことはうっちゃっておけ。人にどう思われようと構わない。それでなければ、本当のことはできないぞ」

と。

「……されば、一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、いづれかまるとよく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨てて、一事をはげむべし。一日の中、一時の中にも、あまたの事の来らんなりに、少しも益のませらん事を営みて、その外をばうち捨てて、大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと心に執り持ちては、一事も成るべからず。……一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをもいたむべからず。人の嘲りをも恥づべからず。万事にかへずしては、一の大事成るべからず。

……」(『徒然草』第一八八段)

と。人間は一生かかって、一つのこと打ち込んでいく。事をする途中で休れようが、どんなに未完成であろうが、その人は必ず天界において完成させられるんです。生きがいがあるんです。もう、楽しくてしょうがないですよ、本当に。ふつふつとして湧いてくるからね。

## ●魂の大回転

もうそうになったら、

34 この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は一日にて足れり。

明日のことは明日でいい。一日を一生として生きよう。そこには永遠がある。どうせ、我々はあと70、80年たてば、みんなあつち側ですよ、ここにいらつしやる方も。その時にですよ、



本当の意味の「あっち側」(天国)でなければ困るですよ、変てこな「あっち側」(地獄)では、そのためには、毎日が、永遠をつかんでいるような生き方をしなかったら、いつぶつ倒れても、「ハレルヤ、万歳!」

そういう生き方をしていなかったらダメです。そういうことを、なぜ、学校で本当に先生方が若い人に言わないか。魂の大回転をしなかったら、人生はつまらんですよ、正直。さつきから、申し上げているとおり、相対的なものにどうのこうのとやっていないで、絶対的なものに打ち込んで行く。そうしたら、相対的なものもちゃんと本当の意味においてオリエンティレン(方向付け)ができる。そして、本当の意味で、この現世においての生き方ができてくるんです。現世はどうでもいいなんて言っているんじゃない。

そういう構造になっているので、申し上げている通り、

「宗教は諸々の文化文明の根底になければならない。根つこの世界である。道徳は幹であつて、枝葉花果は文化文明の諸々の現象である」

と。他にそういうことを言っている人がいるんですか。知りませんが、私ははつきりそう言う。それだけ、実は一番大事なことを20世紀の人間たちはおろそかにし始めたから、もういっぺん、偉大な宗教に——仏教でもキリスト教でもいい——第一級のものにぶつかって、立ち帰れと。

「やまよえる者よ、立ち帰れ」

とさつき歌つたのはその意味です。あなた方がさまよっているなんて言っているんじゃない。世の中がさまよっているから、立ち帰れと。立ち帰ることが本当の前進なんです。原始に帰ることが終末に向かうことなんです。では、このへんにしておきます。

## ● 祈り

祈ります。キリストにおいて自らを顕したもうた真まことの神さま。この会場はなつかしい所です。O先生がその群の方々と同じようにして備えてくださったことを感謝いたします。ここに集まって来た兄弟姉妹たち、みな、相対的なものを乗り越えて、絶対界に、本当の根源現実に自分の存在をつなぐようとしてやって参りました。感謝であります。あなたはキリストの直々の聖言を通して、私たちに親しく、また力強く臨んでくださって、うれしく感謝申し上げます。

この山上の大告白が、今この20世紀の現実に対して、実は根本的な在り方のひっくり返しをなすための聖言であることを知り、感謝であります。私たちはどこまでもあなたに全幅の信頼を投げかけ、あなたの生命にあずかる限り、どんなことがどうなっても大丈夫であるとの大安心をもって、決してうろたえることなく進んで行きたく、また身をもってその事態を証して行きたく存じております。



これを忘れていくがゆえに、この20世紀の文明は何を作ろうが、どう工夫しようが、だんだん自我的な、いわゆる自由とか、あるいは権利とか要求とかでもって、いよいよおかしくなるばかりであります。どうぞ、この人たちが、特に教職にあるところの小学校から大学に至るまでの先生方が新しく自ら己の目を開き、正しき澄んだ純一なる目となり、目が即ち全身の灯火であることの、このキリストの聖言の事態を本当に受けとるようなことになるところが、切に願いたてまつります。

このことはなかなか難問題であります。しかし、私たち一人ひとり、このことに気がついた者は、本当にその証し人として立つのでなければ、どうにもなりません。どうぞ、ここにある兄弟姉妹たちがその証人として、証者として、生涯をいよいよ燃やして行くことができませんように、然らしめていくことができますように、いよいよ、あなたの御光をいただき、本当に不滅の灯火として証することができますように切に願いたてまつります。

一日は即ち一生、永遠として、私たちは一日一日をじつに、心いっぱい、力いっぱい、魂いっぱいに生きてたく存じております。どうぞ、そのようにお導きくださらんことを切に願いたてまつります。

あなたと一つになること。

「我れ汝と一つなり。我と汝とが一つ」

とイエス・キリストは無条件に私たちに絶対恩寵をもって臨んでくださるゆえに、無条件に受けとりたてまつるだけであります。感謝いたします。今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に御名により捧げ奉る。アーメン。

